

ドイツ語正書法の改正について

——歴史、背景、改正点等——

瀧川 一 幸

クラウス・ペーター・クノル

[Kazuyuki Takigawa und Klaus Peter Knoll]

まえがき

今までドイツ語に慣れ親しんできた人が、ある日、『er muß』の代わりに『er muss』と書かれた文や『daß』の代わりに『dass』と書かれた語を見れば、きっと驚くであろう。ドイツ語の書き方の規則はいままでも変わってきているが、大きなものではなかった。しかし今回の改正はかなり大きな変更を含んでおり、注目を集めている。さて、そのドイツ語正書法改正が、ここ10年以上さまざまに論議されてきたが、ようやく1998年8月から実施されることになった。この小論は、この期を捕らえて、ドイツ語正書法の改正について、その紹介をかねて、歴史、問題の背景、論議、改正点などを述べるものである。

正書法の改正と言っても、たかが書き方が少し変わる程度とおおげさに考えない人もいるかもしれないが、使っている文字が違い、歴史が違い、また書き方に対する考えが違えば、その改正が与える影響も違う。周知のようにヨーロッパの国は、言語が違うのに同じ文字や似た文字を使っている。しかもその文字数は、日本人がひらがなとカタカナ、そして何万もある漢字を使っているのに比して、きわめて少ない。また漢字が表意文字であるのに比して、表音文字である。したがって少しの変更が極めて大きな影響を引き起こすのである。またドイツは、歴史的に見ると、現在も『連邦共和国』という国名が示しているように、地方の主体性をきわめて重要視する国である。中世以来、長い間、確か

に神聖ローマ帝国と言う統一性を持つてはいたが、実際は、何百と言う主権を持った国の集合体という形で発展してきた。こうした歴史は、言語にも及んでいる。ドイツ人は、いまでも方言を大切にしているが、ドイツ語そのものも各地のドイツ語、つまりいろいろな方言とってよいドイツ語からなっており、そこから統一的なドイツ語の表示方法（正書法）を形成してきた。これは、ドイツ語の地域性をいまでも大切にしていることの表れであるが、こうした事情の中で正書法を統一的に変えることは非常に難しいことである。またドイツは、ゲーテやシラーなど、言語文化伝統を重んじてきた国であり、昔から『正しく文を書ける』人間は、『知性があり、立派な』人間であることと同一視されてきた。つまり言語をきわめて高く重んじてきているのである。こうした背景の中で、きわめて難しい正書法の改正がドイツ語を使うドイツ、オーストリア、スイスを中心にして論議を重ね、やっとこのほど改正への一歩が踏めるまでに来ている。

この小論は、こうした歴史と背景を述べ、今回の正書法改正の全体像を明らかにしようとするものである。そしてこれは結果として、言語の表記に関心のある人ばかりでなく、日本でドイツ語を学んだり、ドイツ語を使ったりしている人に知ってもらえれば大いに意義があらうと考える。

なお、この論文は、クノルと瀧川がまず全体の構想を相談し、歴史、背景、さまざまな論議、また期限・費用・有効性についての部分をクノルが受け持ち、まえがきと具体的改正点についての部分を瀧川が受け持っている。またほぼ同じ意味の論を日本語とドイツ語の両方で記述する。これは、この方が幅広い理解と深い理解を得られると考えるからである。そして日本語は瀧川に、ドイツ語はクノルに責任がある。また両方の表記に少し表現の相違が出ているが、クノル、瀧川ともに了解済みである。またドイツ語テキストには、ドイツ語を母語にする人にその必要性が小さいと考えて、改正についての前書きを省いている。

I 歴 史

ドイツ語正書法は、前世紀の終わり頃まで広範囲に個人の任意に任されてきた。これは、中高ドイツ語の地域的な特性がときおり、ドイツ語でものを書く限り、いくつかの違ったドイツ語と関わらざるを得ないという印象を与え続けてきたからである。以下、いくつかの短い例文を挙げるが、これを見れば初期新高ドイツ語の正書法の自由度がすぐにわかる。

ヤンゼン・エリケルの世界年代記 (1280 年, 最初のところから)⁽¹⁾

原文

Diu diutsch sprâch ist diu dritt zung
in irer ordenung
diu kan niht kristenlîcher sîn.
die Diutschen sitzent umb den Rîn,
enmitten in der Swâben lant ;
dâ ist diu diutsch zung erkant.

現代ドイツ語訳

Die deutsche Sprache ist die dritte
in der Ordnung
die könnte nicht christlicher sein.
Die Deutschen sitzen am Rhein,
mitten im Land der Schwaben,
dort spricht man deutsch.

ニコラウス・フォン・イエロシンのプロシャ年代記から (約 1330 年, 終わりのほう)

原文

Nû hâb ich mit der gotis hant,
als ich mich dâ vor vorbant,
di cronke von Prûzenlant,
als ich si zu latîne vant,
zu dûtsche schribende volent,
mi tîfen worten nicht behent,

現代ドイツ語訳

Nun habe ich mit Gottes Hand
so wie ich mich vor ihr fand
die Chronik von Preußen
wie ich sie lateinisch vorgefunden
auf deutsch schreiben wollen,
mit großen Worten nicht geübt

(1) この例文と次の3つの例文は、『Die deutsche Literatur. Ein Abriß in Text und Darstellung. Bd. 2: Mittelalter II, Hrsg. v. Hans Jürgen Koch, Reclam, Stuttgart 1982, S. 39, 43, 54 u. 64.』から引用。

want si vornemen mac ein kint. wie ein Kind es machen würde.

ハインリッヒ・ゾイゼの『ゾイゼ (Der Seuse)』から (1362年, 始めのところから)

原文

Hie vahet an daz erste ail dizz bu^oches, daz da haisset der Suse.
Es waz ein brediger in tutschem lande, von geburt ein Swabe, dez nam geschriben sie an dem lebenden bu^och.

現代ドイツ語訳

Hier beginnt der erste Teil des Buches, welches heißt "Der Seuse".
Es lebte ein Prediger in Deutschland, von Geburt ein Schwabe, dessen Name soll in dem lebendigen Buch geschrieben stehen.

ハンス・シルトベルガーの旅行記から (約1440年, 『帰国』から)

原文

Und cham dornach mer zu einer stat, die haist Sedschopff und ist hauptstatd in der clainen Walachei. Ich cham auch dornach zu ainer stadt, haist in teutzsch Lem-purgk.

現代ドイツ語訳

Danach kam ich zu einer Stadt namens Sedschopf, die ist Hauptstadt der Kleinen Wallachei. Ich kam danach zu einer Stadt, die auf deutsch Lemburg heißt...

こうしたテキストをちょっと見ただけで、ドイツ語もしくはドイツという意味の語に対して、4つの違った書き方が目につこう。つまり、『diutsch』、『düttsch』、『tüttsch』、『teutzsch』と書かれている。シルトベルガーのテキストはもう完全に新高ドイツ語であるが、我々に (現在の正書法改正を論じている政治家ばかりにではなく) 自由な書き方とはどんなものかを観察する十分な機会を与えてくれるだろう。例えば、町を意味する語が、『stat』とも『stadt』とも書かれ、

また『heißen』は、『es haist』とも『es haysset』とも書かれていたりするのだから。

初期新高ドイツ語は、まだはっきりと、部分的にまったく違っていた方言から成り立ってきたことを窺わせている。しかし最初から(さまざまな書き方を)単純化しようとし、体系化しようとする強い要求があったことがみられる。13世紀と14世紀に官庁や裁判所で文字で書いた証書類が一般的なものになってゆく時代に、領主の官房の中から書き言葉の統一の気運が広まって行く。15世紀中葉のグーテンベルクの活版術の発明は、こうした発展をさらに押し進める。しかし一番強くこうした気運を引き起こしたのは何と言っても1534年のマルチン・ルターの聖書(この元の題名は、『Biblia, das ist die gantze Heilige Schrift』であった。)の翻訳である。上部ドイツと東中部ドイツの要素が混じりあったドイツ語でこの聖書は多くの読者に受け入れられた。またパリエーションの豊かな文体が聖書を言語芸術作品にまで高めている。ルターの聖書ほど当時のドイツ神聖ローマ帝国のすべての領域の隅々にまで、またあらゆる身分の人にまで普及したテキストはなく、空前絶後のものと言えよう。その新高ドイツ語へ統合してゆく過程への影響はどれほど評価されてもされ過ぎることはない。

17世紀の言語社会の活動、特に辞書の出版はたしかに一方では、正書法の統一化に大きな寄与をなす。が、しかし他方ではときおり奇妙な開花も見た。方言や特に外国語を排除したいという努力がなされたが、おかしな提案も見られる。例えば、現代ドイツ語の鼻、『Nase』はラテン語から来ているが、これを訳せば『顔の出っ張り』という意味の『Gesichtserker』と言うような案が考えられたり、またラテン語がフランス語経由で入った、ピストルを意味する言葉『Pistole』は、暗殺を意味する『Meuchel』と『バアンとするもの』とでも訳せる『Puffer』の合成語『Meuchelpuffer』が提案される。ヴィーラント、レッシング、ゲーテは彼らの文学作品で中部ドイツの言い回しを一般的なものに広める。が、しかし正書法は、ずっと多くのさまざまな書き方を受け入れたままであった。

グリム兄弟のドイツ語辞典は、16世紀以来のドイツ語語彙を包括的に棚卸してみようという記念碑的な試みである。ヤーコブとヴィルヘルムの兄弟は、およそ1838年にこれを始めるが、この企ては巨大なものに成長する。1854年以降最初の巻が出版され始めるが、完成は1961年である。彼らが亡くなってほぼ100年後（兄ヤーコブの方が長生きしたが、1863年に亡くなる）のことであった。今日、この辞書はきわめて大きな歴史的価値のあるものである。しかし（正書法の観点から言うと）グリムの辞書はまったく書き方の基準をつくらうという試みとはみなされない。現存するドイツ語の語彙の収集と秩序化とみなされよう。つまりどの項目も時には1ダース以上にもなる出典で埋められているからである。ドイツ語正書法を基準化する仕事は、まったく別の人（Geist）に残されることとなっていた。コンラッド・ドゥーデン（1829—1911）の『完全ドイツ語正書法辞典』⁽²⁾が一般的にドイツ語の統一正書法の草分けとみなされる。この場合、初版の187ページの薄い巻は、この課題に答えるのにふさわしかったとは言いがたいものである。やっと彼の仕事を引き継いだもの達が、正書法の基準化の成功を誇れよう。つまりマンハイムの文献学研究所がドゥーデンの名前を使って言葉の書き方のいわば登録商標（amtlich geschützes Warenzeichen）を作ったのである。そしてこの成功はもちろんヴィルヘルム2世時代のお役所の意向無しには想像もできないことである。そしてこうした時代の流れを考えれば、『公的ドイツ語正書法（die “amtliche deutsche Rechtschreibung”）』が、1901/1902年にベルリンで行われた第2回正書法会議で決議されたのも偶然ではなからう。公的、つまり『官制の（amtlich）』の正書法を使っているヨーロッパの国はドイツ以外には知らない。日本でも勿論、1946年よく似たことがあった。即ち、2000弱の当用漢字のリストが政府によって条例で周知された。そしてこの漢字であらゆる日本語の出版物は間にあうものとされた。1955年（ドゥーデンは44年前に亡くなっている）に『ドゥーデン（der Duden）』はドイツ文部大臣らの決議によって『公的ドイツ語正書法』の拘束力のある基盤となる。

(2) マンハイム、1880年出版。

この時以来、ドゥーデン編集部のいくつかの非体系的な新規則、つまりいわゆる『追加』があっただけで、現在に至っている。

II 正書法改革の背景

学生運動など反権威的な時代にまたドイツ語正書法も（およそ 1970 年から）批判の矢面に立つようになったのはおそらく偶然ではなかろう。改正への要求にはまったく正当性がないわけではなかった。つまりあまりにも長い間、『正しく文を書く』ことは、『知性がありしっかりした性格がある』ことと同一視されつづけてきた。しかしドゥーデン編集部の統一性のない、ケース・バイ・ケースの、あらかじめ一般的慣習になったものを後になって追認してゆく決定方法は、規則全体を見渡せ難しくし、通常ドゥーデン正書法の使用者にとって制御しがたくさせた。今日、私見では、ベテランの秘書と校訂専門家しか普通の文をドゥーデンに忠実に書くことはできないだろう。そして（ドゥーデン正書法の観点から見れば）すべてのテキストの大部分（ジャーナリスト、作家、政治家、批評家の文も例外ではない）が校訂の必要がある類のものとなろう。何せ、312 の規則、数限りない例外、これに加えて組み版と印刷のための規則があるのだから。いったい、誰がこれら全部を頭に入れておけようか。

ここに短い小問題を挙げてみよう。是非自分で解いてみて頂きたい。そうすれば如何にドゥーデン正書法が難しいかが理解できよう。

問題(1) 次の単語は、どこで文綴するのか？

Sigle, Sigma, Signatur, Morgue.

問題(2) 次の書き方は許されるのか？

Fotografie, Orthografie, Grammofon, Mikrofon, Oxid, Scharm.

(3) 正解：問題(1) Si-gle, Sig-ma, Si-gnatur, Morgue. 問題(2) Fotografie：正, Orthografie：誤, Grammofon：誤, Mikrofon：正, Ozid：正, Scharm：正, 問題(3) 1 = im dunkeln, 2 = im Dunkeln, 3 = mit Bezug auf, 4 = in bezug auf, 5 = Autofahren, 6 = radfahren. 問題(4) 正解は, Schiffahrt, Schiff-fahrt, Sauerstoffflasche.

問題(3) 次の下線部は、大文字で書くのか、小文字で書くのか？

Er tappt in dieser Frage im dunkeln.……Nach dem Stromausfall saßen wir im dunkeln.

Mit bezug auf……in bezug auf.

Er fährt auto.……Er fährt rad.

問題(4) どの書き方が正しいのか？

Schiffahrt, Schiff-fahrt, Sauerstoffflasche.

ある種の教師にとって、サディスティックで尊大なタイプといえようが（ある教師は『私の授業ならゲーテでもせいぜい [良] しか取れなかつただろう』と言っている）、こうした『規則』集は楽しみに違いない。しかし主に何かを書いたもので伝えたい者にとっては、ドゥーデン編集部の仕事に対してまったく違った判断が生じてこよう。

しかしながらドイツ語では（英語やイタリア語とは違って）言葉が神聖な文化財⁽⁴⁾と考えられているので、伝統主義者と革新派が互いに対峙し合い、あらゆる改定の進行を妨害しあうまで、たいして長くはかからなかった。最初の会議から1998年の改正の導入まで18年が過ぎてしまうということ自体がすでに、この企画が引き起こした戦いについていくらか予想させてくれよう。戦いはかならずしも先の見通しの効くものではなかった。すなわち、スイスは最初から『B』を通常の文字として扱う気がないと言明していた。ドゥーデン編集部は、正書法改正と言う大胆な企てをできるなら自分たちの庇護の下に置いておきたかつただろう。ドイツ・ペン・クラブは出来ることならフランスをお手本にして言語アカデミーを設立したかつただろう。各国選抜の作業グループの文献学

(4) ヴェルス（オーストリアの田舎町）のギムナジウム教師、Franz Seidlmayr の70年代の発言。彼は生徒たちの親を困らせたとして地方的な名声を得た。この問題では彼の発言はまったく正しい。『ゲーテとドゥーデン—これは一緒に手を組めない』

(5) フランスでも同様。フランスでは、すべての英語の単語を日常語から追放しようとする要求でヨーロッパ外でも行き過ぎが笑い話になっている。コンピューターというような言葉ですらお役所側からフランス語化しようという試みはおそらく何十年かずっと遅れるであろう。コンピューターに対して、ordinateur という語を使っていると聞く。

者たちはまずいわゆる『穏健な』名詞の小文字書きに賛成の意を述べていた(固有名詞や文頭は大文字を続けるが)。政治家たちはそんなことは問題にもならないと伝え、それ以降この件を気にもかけなかった。

1980年バーゼルで正書法のための国際作業委員会が設立された。ここには西ドイツ、東ドイツ、スイス、それにオーストリアの学者たちが加わっていた。8回の会議⁽⁶⁾で自国の研究グループ⁽⁷⁾と協力して正書法の改正案が作成された。1985と1988/89年、それぞれの案は公表された。特に西ドイツでは、1988/89年の案が憤激の嵐を浴びた。批判は、『Kaiser』の代わりに『keiser』と書けと言ふような新しい書き方や穏健な小文字書きの提案によって火がついた。

専門会議と並んで1986年来、政治的な次元でも正書法改正について論議されるようになった。正書法国際作業グループが1992年に公表した案は、ドイツ、オーストリア、スイスで政治的な専門的判断の下に置かれ、手が加えられ、1994年のウィーン会議で決定された。オーストリアとスイスのそれぞれの管轄の政治的審議会は、この改定をその年の内に決議した。しかしドイツでは、州文部大臣全国会議による改正決議の直前にひと騒動⁽¹¹⁾があった。バイエルンの文部大

-
- (6) 1982年と1989年にウィーンで、1984年と1988年にロストックで、1986年と1990年にマンハイムで、1987年にチューリッヒで、1991年にロルシャッハで。
- (7) 『ドイツ語研究所の正書法問題審議会 (Kommission für Rechtschreibfragen des Instituts für Deutsche Sprache, Mannheim)』、『ロシュトック大学とベルリン言語学中央研究所の正書法研究グループ (Forschungsgruppe Orthographie der Uni. Rostock und des Zentralinstituts für Sprachwissenschaft, Berlin)』、『オーストリア授業と芸術の連邦省の正書法調整審議会の専門作業グループ、ウィーン (Wissenschaftliche Arbeitsgruppe des Koordinationskomitees für Orthographie beim Bundesministerium für Unterricht und Kunst in Österreich, Wien)』、『州教育委員長スイス全国会議正書法改革作業グループ (Arbeitsgruppe Rechtschreibreform der schweizerischen Konferenz der kantonalen Erziehungsdirektoren, Bern)』。
- (8) 『ドイツ語正書法とその新規則 (Die Rechtschreibung und ihre Neuregelung)』、『ドイツ語研究所正書法問題審議会 (Kommission für Rechtschreibfragen des Instituts für Deutsche Sprache, Mannheim) 出版。1985年。マンハイム。(Sprache der Gegenwart 66巻と同じ)』
- (9) 『ドイツ語正書法の新規則への提案』、注8の研究所出版。デュッセルドルフ/ベルリン、1989年出版。『現代の言葉 77巻 (Sprache der Gegenwart, Bd. 77)』
- (10) いわゆる『ウィーン会談』、1986、1990、1994年開催。
- (11) 次章『さまざまな意見』参照。

臣ハンス・ツェーエントマイルは、『Apoteke』と言う副つづり方（主つづり方は、Apotheke）、『zellofan』と言う副つづり方（主つづり方は、zellophan、専門用語としては、Cellophan）、同じく『Tron』（主つづり方は、Thron）や『heiliger Vater』（主つづり方は、Heiliger Vater）などの副つづり方に対してはまったく責任を引き受けられないと述べた。同じカソリックの国オーストリアとスイスは、委員会の提案をすでに承認していたが、少し感情を害した反応を見せた。しかしながら、改正案は、同年12月にCDUの州文部大臣たちも同意できたが、その前にもう一度改正されねばならなかった。

III さまざまな意見

州文部大臣会議による決議の前の2ヶ月間、正書法改正は突然世論の関心を買った。前年の9月から12月まで、正書法改正というテーマで日刊紙や週刊誌に何千とはいかないまでも、何百と言う記事が現れた。表明されなかった意見などはほとんどなかったろう。筆者は二、三の特に的確な記事と、また二、三の特に不的確な記事を引用してみる。なお、この小論のテーマの現在の意義と日本からデータを入手するにかかる長い時間のため、次に引用する資料の一部は、インターネットを利用している。この資料は非常に説明する目的になっているので、この種の電波を使った資料は少し不正確さがありうるが、これには目をつぶらざるを得なかった。

—(いくつかの)州から出たCDUの留保が正書法改正を遅らせる。1995年9月14日—
オーストリアとスイスで認められたドイツ語正書法の改正はさしあたって、いくらか延ばされそうである。5つの州議会でCDUは、本日、専門会議によって1994年の終りにすでに協定された新しい規則一覧に対して重大な留保をすると申し出た。改正規則全体に対してはドイツ側で全国州文部大臣会議と並んで連邦内務省が管轄である。

(略) その草案がすでに水曜日にザールブリュッケンで周知されていた文書の中で、CDUの政治家たちは、計画された形でのどんな正書法改正も政治的な承認が必要であると論拠だてた。すなわち、『文化の主権はドイツでは州にあるので、ドイツ語の広範囲な変更はただ州議会の同意と国家間条約の締結によってのみ可能である』云々と

いうことである。(略) ラインラント・プファルツのCDU 議員団団長ポェールにとっては、改正は自分の党からのつき上げで『少なくとも今年にはなくなる』ようだ。それに反して、ニーダーザクセンの文部大臣ロルフ・ヴェルナーは州議会の同意など不⁽¹²⁾必要である⁽¹²⁾と考える。なぜなら改正の同意など、もともとあり得ないからと言う。

文化の主権という魅惑的な想像が湧き上がれば、バイエルンでは、『Wir sind wir.』と書くところを『Mia san mia.』と書けようし、ベルリンでは、『Ich habe dir doch gesagt.』と書くところを『Ick hap dir doch jesacht.』と書けるだろう。

—元州文部大臣ゴェルター『正書法改正片づく』と語る。マインツ発。—
ドイツ語正書法改正は元ラインラント・プファルツ州文部大臣ゲオルク・ゴェルター(CDU)の判断によれば挫折した。『改正を止めるものは、改正などできつこないことを知っている。この議論は片づいた。私は関係者が今、新しい議論を煽っているのにはついてゆけない。』と大臣として改正のために戦った、CDU 党の政治家は語った。バイエルン、チューリングゲン、ノルトライン・ヴェストファーレン州からは、予定され⁽¹³⁾ている議決の2～3週間前に変更の要求が声高く述べられた。

—ペン・クラブ会長イングリッド・バッヒアー正書法改正に反対。ベルリン/デュッセルドルフ発 (ドイツ共同通信社)。—
西ドイツ・ペン・クラブ会長イングリッド・バッヒアーはきっぱりと計画されているドイツ語正書法改正に反対と明言した。ベルリンの日刊紙『ヴェルト』への寄稿の中でデュッセルドルフ生まれの女流作家は⁽¹⁴⁾(改正が行われれば)言葉のアイデンティティと歴史意識を喪失すると警告した。

そのような例のひとつとして、イタリアが『physica』と書くところを『fisica』と書き始めた時に言葉のアイデンティティを喪失したことが挙げられよう。

(12) 出典は、EMP (= Electronic Media Publishing, [http: www.germany-live.de](http://www.germany-live.de), 4.9.1995) による。

(13) 同上。20.9.1995.

(14) 同上。28.9.1995

いくつかの連邦州では、州内閣が部分的にまだ正書法改正と関わっていないことがドイツ共同通信社のアンケートで判明した。⁽¹⁵⁾

この記事からは、実際には、さまざまな政治審議会が自分たちの役人を絶えず、改正を審議する委員会に送り込んでいるにもかかわらず、正書法改正は一種の市民側の主導であると結論できるかもしれない。

ボン発（ドイツ共同通信）。—

全国文部大臣議会の議長ローゼマリー・ラープ (SPD) は、議論のある正書法改正は今年中には議決されることを確信している。『私の出発点は、州文部大臣全国会議はドイツ語正書法改正の提案された新規則に同意するだろうと言うことです』とこのハンブルク州文部大臣はボン・ゲネラル・アンツァイガー紙（金曜日版）に語った。州文部大臣たちは11月30日に会議する。

新提案に反対する他の州文部大臣たちの留保を議長は退けた。これらの留保は、改正の核心についていない。『新提案は、専門的な書き手ですら、もはや見通しがたなくなった特例と例外規定が多過ぎる点を廃棄しようとしているのです』⁽¹⁶⁾

この記事に対しては、当小論の少し前に筆者が出してみた問題（67ページ参照）と比較してもらいたい。

—13年間のストレス—

いまわしい正書法改正（正書法改正など悪魔に食われろ！）に関する喧喧器器の論議はこの前の州文部大臣全国会議を席捲したので、改正のもっと重要な決定がその中でほとんど消えてしまった。すなわち、アビトアー（大学入学資格試験）では、すべてが（正書法問題以外の問題も）、もしくはほとんどすべてが以前のまま残るということである。⁽¹⁷⁾

これはまあ実際、的確で専門的に根拠付けされた意見である。これに対しては

(15) ドイツ共同通信社 (dpa) 報道。28.9.1995.

(16) ドイツ共同通信社 (dpa) 報道。6.10.1995.

(17) ライナー・シュテファン (Rainer Stephan), 南ドイツ新聞の05, 12, 1995の社説。

バンベルクの言語学者ヘルムート・グリュックの考えがぴったりと合うだろう。

将来も、生徒が書き方を習う場合に遭遇する問題が正書法の改正の基準になるというのはよろしくない。予定されている決定がマンハイム（ドゥーデン編集部所在地）の奥の部屋でたくらまれるとしたら不幸なことであろう。—(略)—最良の専門家たちに委託されねばならない点とは、我々の正書法を見守りながら研究することである。そして作家、ジャーナリスト、学者や政治家として言葉とのつき合いの中で創造性と学識に裏づけられた能力を実証した教養ある人々が、将来、正書法の変更の決定をすべきではあるまいか。⁽¹⁸⁾

この委員会の議長として南ドイツ新聞の論説委員 (Rainer Stephan) が望ましい。グリュック教授は、むしろまた正当な疑念を主張する。

いくつかの不愉快なことが残っている。言語学者の中にはほとんど誰一人として留保なしに改正に同意する者がいないのである。個々の言葉の書き方の変更、例えば、『behände (現行はbehende)』や『Flusssand (現行はFlußsand)』に懐疑の念が起ることはまだいい。深刻なのは、いくつかのうまく機能している文法体系が破壊されてしまうことだ。つまり将来は、『Sie pflegte, zu joggen.』とか『Ich rate Ihnen ernsthaft zu helfen.』というような書き方が訂正されるだろう。また例えば、『staub/saugen.』とか『gefangen/nehmen.』というような多くの複合動詞も分離して書くことになろう。文法的に意義深い、読者に優しい『daß』と言う書き方は、『dass』に変えられ⁽¹⁹⁾る。—[略]—生徒たちはこう改定しても、この点で間違わないようにならないのに。

この点では次の記事はるかに教訓的であろう。

—正書法改正は憲法違反か?—

法律家エアハルト・デニングーは計画されている正書法改正は憲法違反と考える。本質的な基本法への介入を州文部大臣たちの会合がするのは許されない。議会によって

(18) 週間新聞ヴェルト (Die Welt) の 1995.12.13. 参照。

(19) 同上。

議決されるべきである。こうデニングァーは週刊誌シュピーゲルに語った。⁽²⁰⁾

自由な正書法の書き方の基本的人権。筆者は反対しない (Ich hobnix dagegn. = Ich habe nichts dagegen.)。この記事に対しては一番先に引用した1995年9月14日付の記事を参照されたし。

総じて論争的な記事はちょうど個々の州文部大臣全国会議の時期に頻出するのが目立つ。[その例省略]

こうした類の文は、少なくとも70年代の中葉からメディアに出没してきていたが、たいていはいくらか混乱しており、めったに論議を引き起こすことはなかった。

それほど多くはないが、熟考された意見のひとつがハラルツ・H・チンマーマン教授の詳細な記事の中に見られる。

たとえ今回の改正が多くが期待した『大きな企て』でないにしても、隠しておいてはならない。なぜなら改正ははっきりとドゥーデンの改訂の度にすでに数年前から企てられている書き方の『追加』よりは重要であるからである。⁽²¹⁾

IV 新規則の総覧

現行の正書法に比較的大きな問題を起こすのは特に次の4点であろう。母音の長短の標識、外来語の書き方、一緒に続けて書くか、分ち書きするか、そして最後に語頭の文字を大文字で書くか、小文字で書くかである。

上述したすべての点で正書法改正は単純化とすこし一貫した規則を入れる。

4-0. 全般に関すること

基本原則として『慎重な単純化』と『語幹原理』を挙げられよう。ここで『慎重な (behutsam)』というのは、もちろん部分的な矛盾、政治的な対立、原理貫徹を考えて不完全なままにしておかねばならなかったすべてのことを目立たな

(20) 出典は、German News-WebZine Xculture。日時不詳。

(21) 『正書法改正—単純化か、不明確化か?』南ドイツ新聞、1995. 11. 26 日付記事。

くしている婉曲的な言い回しのことである。『語幹原理』というのは、派生語総体の中でできる限り語幹を同じ書き方に統一することを目的にする。その決定基準は、ある言葉が今日の言語使用の中である派生語に入れられるか、どうかである。しかしこのことはむろんドゥーデン編集部のいくつかの規則に負けず劣らず不明確なものである。例えば、『behende』と言う語に対して、その語幹『Hand』を老練なゲルマニストですらなかなか言い当てられないのではなかろうか。

4-1. 音声と文字（外来語の書き方も含む）

ドイツ語の歴史的に生じてきた文字面^{もじづら}を変えてしまうような深刻な処置は予定されていない。以前の案はしばしばこの点で挫折したのである。新しい規則は、もっぱら語幹原理の違反を排除することに集中している。

4-1-1. ウムラウトを持つ語の個別ケース

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|-----------------|---|----------------------------------------|
| behende | → | behände(語幹は Hand) |
| belemmert | → | belämmert(語幹は今日では Lamm) |
| Bendel | → | Bändel(語幹は Band) |
| Gemse | → | Gämse(語幹は Gams) |
| Quentchen | → | Quäntchen(語幹は今日では Quantum) |
| Schneuzen | → | schnäuzen(語幹は Schnauze, großschnäuzig) |
| Stengel | → | Stängel(語幹は Stange) |
| überschwenglich | → | überschwänglich(語幹は Überschwang) |
| verbleuen | → | verbläuen(語幹は今日では blau) |

ただし Eltern(両親)は、語幹が alt であるが、今後も Eltern。

4-1-2. 短母音の後、子音文字を重ねる語の個別ケース

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|---------|---|-------------------------|
| Karamel | → | Karamell(語幹は Karamelle) |

(22) こう、ドゥーデン編集員ギュンター・ドロストブスキー教授、週刊誌シュピーゲル(1995年25号)に語る。

| | | |
|----------------------|---|--------------------------|
| numerieren | → | nummerieren(語幹は Nummer) |
| plazieren(placieren) | → | platzieren(語幹は Platz) |
| Stukkateur | → | Stuckateur(語幹は Stuck) |
| Tolpatsch | → | Tollpatsch(語幹は今日では toll) |

4-1-3. 短母音の後にくる『ß』を『ss』と書く場合

語幹の同じ書き方を確保するために、短母音の後の『ss』を『ß』と書き換える規則を無くし、一貫して『ss』と書くようにする。つまり、『Wasser/wässerig/wässrig』と書き、『müssen/er muss』と書く。

それに対して、『Maß, Muße, Straße』のような『ß』は残され、先行する母音が長音であるか、無声音の s の前の複母音であること（例えば draußen, beißen のように）を一義的に表示する。

接続詞の『daß』は、一短母音の後には『ss』が来るという一般的な規則に準じて、一『dass』と書く。こうした措置で定冠詞ならびに関係代名詞の『das』との区別は保持される。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|------------------|---|-------------------------|
| hassen—Haß | → | hassen—Hass |
| küssen—Kuß | → | küssen—Kuss |
| Sie küßten sich. | → | Sie küssten sich |
| lassen—er läßt | → | lassen—er lässt |
| müssen—er muß | → | müssen—er muss |
| Wasser—wässerig— | | |
| wäbrig(現行の例外) | → | Wasser—wässerig—wässrig |
| daß | → | dass |

4-1-4. 合成語の中で語幹を保持して書くこと

合成語の中で三つの同じ子音が重なる場合、例えば、『Ballett+Truppe』や『Ballett+Tänzer』のような場合、これからは一貫してすべての子音を書く。つまり現行規定では、3つの同じ子音の後に別の子音が更に来る場合、例えば『Sauerstoffflasche』のような場合、例外として3つの子音を書いてきたが、例外でなくなる。ハイフンを入れる書き方は、いつでも可能となる。

この規則は、いまでは姿を消して行く少数の語だけに関するのだが、メディアの中では特にしばしばたたかかれてきた。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|---------------|---|---------------|
| Flanellapen | → | Flanelllappen |
| Flußsand | → | Flussand |
| Balletttänzer | → | Balletttänzer |
| Stoffetzen | → | Stofffetzen |

しかし『dennoch, Drittel, Mittag』はこれからも今まで通りにする。

首尾一貫して接尾辞『-heit』の場合でも、先行する語の最後尾が『h』であれば、それは保持される。つまり、『roh+heit, zäh+heit』は、現行では、『Roheit, Zähheit』であるが、新規定では『Rohheit, Zähheit』となる。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|-------------|---|------------------------------------|
| Roheit | → | Rohheit |
| Zäheit | → | Zähheit |
| Zierat | → | Zierrat (Vorrat のように) |
| selbständig | → | selbständig/selbstständig (両形とも可能) |

4-1-5. 個々の場合の一貫性

これまでの『rauh, Känguruh』という書き方が、『rau, Känguru』に変更される。これは、前者は『blau, grau, genau, schlau』と言った『au』を持つ形容詞との一いささか無理があるが、類似により、後者は『Emu, Gnu, Kakadu』のような他の外国語の動物名表記との類似による。

『-anz, -enz』を語の基底に使った名詞に準じて、『z』を書く書き方が主つづり方となる。例えば、『essenziell』など。これまでの『t』を書く書き方、例えば『essentiell』等は、副つづり方として残される。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|---------------|---|------------------------------------------------|
| essentiell | → | essenziell (語幹は Essenz), または essentiell |
| Differential | → | Differenzial (語幹は Differenz), または Differential |
| differentiell | → | differenziell, または differentiell |

| | | |
|--------------|---|-----------------------------------------------|
| Potential | → | Potenzial (語幹は Potenz), または Potential |
| potentiell | → | potenziell, または potentiell |
| substantiell | → | substanziell (語幹は Substanz), または substantiell |

4-1-6. 外 来 語

この面では新規則は、政治的な抵抗⁽²³⁾で首尾一貫しておらず、また見通しがた
い。特に『-th-, -ph-』の音声グループは統一的に解決されなかった。最小共通
分母を取ると言う案で統一したかのように見える。

| | | |
|--------------------|---|---------------------------------------------------|
| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
| 『ai _i 』 | → | 『ai もしくは ä』 |
| Frigidaire | → | Frigidaire, または Frigiär (登録商標の語としては Frigidaire) |
| Necessaire | → | Necessaire, または Necessär (Mohär, Sekretär 等との類似で) |

| | | |
|--------------------|---|------------------------------|
| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
| 『ph _i 』 | → | 『ph もしくは f』 ⁽²⁵⁾ |
| quadrophon | → | quadrophon, もしくは quadrofon |
| Photometrie | → | Fotometrie, もしくは Photometrie |
| Geographie | → | Geographie, もしくは Geografie |
| Graphologie | → | Graphologie, もしくは Grafologie |
| Orthographie | → | Orthographie もしくは Ortografie |
| Delphin | → | Delphin, もしくは Delfin |

(23) 第2章を参照。

(24) 審議会の決議提案の中で、これに対して次のように述べられている。『例えば、[phon, phot または graph] という語幹の中にある [ph] の代わりに [f] と書く書き方は、もっと多くの例に広げられる。しかしこれらの語幹から他に無理に適用させるのはやめる。[Philosophie, Phänomen, Metapher, Sphäre] のような語は、これからも更に今まで通りに書かれる。』『ドイツ語正書法, 規則と語彙索引。官庁規則のための模範。』ドイツ語正書法の国際作業委員会発行。G. Narr, Tübingen, 1995年出版。

(25) ここでは新規則は特に一貫していない。なぜある場合に、「graph」を持つ語の場合『ph』が主つづり方であるのに、別の場合には、「fot」を持つ語の場合『f』が主つづり方になるのか、確認できない。

| | |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| 現行の書き方 | 新しい書き方 |
| 『gh』 | → 『gh もしくは g』 |
| Joghurt | → Joghurt, もしくは Jogurt |
| Spaghetti | → Spaghetti, もしくは Spagetti |
| 現行の書き方 | 新しい書き方 |
| 『é と ée』 | → 『é/ée もしくは ee』 |
| Bouclé | → Bouclé もしくは Buklee |
| Exposé | → Exposee もしくは Exposé |
| Chicorée | → Chicorée もしくは Schikoree (Allee, Armee, Komitee, Resümee との類似から) |
| 現行の書き方 | 新しい書き方 |
| 『qu』 | → 『k』 |
| Kommuniqué | → Kommuniqué, または Kommunikee (Etikett, Likör などとの類似) |
| 現行の書き方 | 新しい書き方 |
| 『ou』 | → 『ou もしくは u』 |
| Bouclé | → Bouclé, または Buklee (Nugat との類似から) |
| 現行の書き方 | 新しい書き方 |
| 『ch』 | → 『ch もしくは sch』 |
| Ketchup | → Ketschup, もしくは Ketchup |
| Chicorée | → Chicorée, もしくは Schicoree (Anschovis, Broschüre, Haschee, retuschieren, Scheck などとの類似から) |
| 現行の書き方 | 新しい書き方 |
| 『rh』 | → 『rh もしくは r』 |
| Katarrh | → Katarrh, または Katarr |
| Myrrhe | → Myrrhe, または Myrre |

| | | |
|------------|---|-------------------------------------------------------------------------|
| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
| 『c』 | → | 『c もしくは ss』 |
| Facette | → | Facette, または Fassette |
| Necessaire | → | Necessaire, または Nessessär (現在そうになっている Fassade, Fasson, Rasse 等の類似から) |
| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
| 『th』 | → | 『th もしくは t』 |
| Panther | → | Panther, または Panter |
| Thunfisch | → | Thunfisch, または Tunfisch |

4-2. 分ち書きするのか、ひとつに続けて書くのかの事項(ハイフンを含む)

『Auto fahren/ich fahre Auto. と書くが、しかし radfahren/ich fahre Rad. と書く』のような(名詞等と動詞との)結合形は、全面的に分ち書きして書く。内容の違いによる書き方の違いは、分ち書きを通すために他のたいていの場合にも廃棄される。分ち書きするか、ひとまとめに書くかの基準としての具体的な意味か、転義した意味かの相違、例えば『auf dem Stuhl sitzen bleiben (椅子に座りつづける)』という具体的な意味と『in der Schule sitzenbleiben (学校で落第する)』という転義した意味の相違は無くなる。その理由は、この基準がこれまでも機能してきていないからである。例えば、『im Bett liegenbleiben (ベットに横たわり続ける)』は、具体的な意味であるのにひとまとめに書かれ、それに反して転義した意味で使われる『mit seinem Plan baden gehen (彼の計画は失敗した)』は、分ち書きされてきている。この点でも分ち書きが一貫して通される(それだけでなくこの変更されるケースでこれまで、『er blieb in der Schule sitzen.』と書かれてきた)。こうしたすべてのケースがこれからは一貫してテキストの意味関係から理解されることになる。この方法が(名詞の語頭の)⁽²⁶⁾大文字書きと小文字書きの新規則に忠実にゆくからである。

(26) 『4-3.』章を参照。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|----------------------------------------|---|-----------------|
| radfahren | → | Rad fahren |
| Auto fahren (現行での例外) | → | Auto fahren |
| teppichklopfen もしくは Teppich klopfen | → | Teppich klopfen |
| haltmachen | → | Halt machen |
| abwärtsgehen(『悪くなってゆく』という意味) | → | abwärts gehen |
| abwärts gehen(『下へゆく』という意味の時) | → | abwärts gehen |

現行規則でも『so viele, wie viele』などと既に分かち書きされているが、新規則では『so viel, wie viel』とこれらも分かち書きする。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|-------------------------------------------|---|---------------------|
| soviel, wieviel | → | so viel, wie viel |
| ただし, so viele, wie viele (現行でも分かち書きされている) | → | so viele, wie viele |

それに反して、『irgend』がつくすべての結合形はひとまとめに続けて書く。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|--------------------|---|--------------|
| irgend etwas | → | irgendetwas |
| irgend jemand | → | irgendjemand |
| irgendwer (現行の例外) | → | irgendwer |
| irgendwann (現行の例外) | → | irgendwann |

ハイフンの規則は、ゆるめられる。その結果としてハイフンを入れることはいつでも原則として書き手の自由となる。ただしもちろんひとまとめに続けて書く書き方が根本的にはこれからも主つづり方である。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|-------------------------|---|---------------------------------------|
| Ichform, Ichsucht, | → | Ichform/Ich-Form, Ichsucht/Ich-Sucht, |
| ただし Ich-Laut (現行規則の形) | → | Ich-Laut |
| 17 jährig, 3tonner, | → | 17-jährig, 3-tonner, |
| 2 pfünder | → | 2-Pfünder |
| 4 silbig, 100 prozentig | → | 4-silbig, 100-prozentig |
| Kaffee-Ersatz | → | Kaffee-Ersatz もしくは Kaffeeersatz |
| Hair-Stylist | → | Hairstylist もしくは Hair-Stylist |
| Job-sharing | → | Jobsharing もしくは Job-Sharing |

| | | |
|-----------------|---|-------------------------------------|
| Midlife-crisis | → | Midlifecrisis もしくは Midlife-Crisis |
| Sex-Appeal | → | Sexappeal もしくは Sex-Appeal |
| Shopping-Center | → | Shoppingcenter もしくは Shopping-Center |

4-3. 名詞の語頭を大文字書きするか、小文字書きするか。

この問題がいまわしいのは、生徒ばかりではあるまい。何世紀にも渡って一貫して小文字書きが続いていた。それで例えばグリムの辞書ですらもまだ名詞の大文字書きを知らない。名詞の大文字書きは、ドイツ語が本質的に他の言語と比べて名詞化する可能性をずっと多く持っている限りにおいては、意味がある。しかし他方話している時に、名詞や名詞化された形容詞が来た場合、話し手はいちいち必ずしも『ほら名詞ですよ』とは表示しない。正書法を単純化する流れの中で、小文字書きのいくつかの特殊形が議論になった。穏健な小文字書きの案、つまり文頭と固有名詞は大文字で書き、その他すべては小文字書きというのがいったんはオーストリアとスイスの同意を得たが、結局はドイツ側の抵抗でつぶされ、筆者の考えでは次善と思われる解決策が選ばれた。かくして前置詞と結合する名詞、例えば、『auf Grund, in Bezug, mit Bezug』や動詞と結合する名詞、例えば、『Rad fahren, Tennis spielen』などが将来統一的に大文字書きされる。

| | | |
|------------------------|---|---------------|
| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
| in bezug auf | → | in Bezug auf |
| ただし現行でも, mit Bezug auf | → | mit Bezug auf |
| radfahren | → | Rad fahren |
| ただし現行でも Auto fahren | → | Auto fahren |

この場合でも首尾一貫していないものとして記載しておかねばならないものは、いくつかの例外が残り続けることである。つまり特に『sein, bleiben, werden』等と結合して『Angst, Gram, Leit, Pleite』というような語を書く場合には、小文字書きする。

| | | |
|------------------------|---|------------------------|
| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
| angst (bange も) machen | → | Angst (Bange も) machen |
| 現行でも Angst haben である。→ | | Angst haben |

schuld geben → Schuld geben
 pleite gehen → Pleite gehen

ただし、『bange sein, gram bleiben, pleite werden』と書く。特に、また『Mir wird angst. Sie sind schuld.』と書く。

首尾一貫して大文字書きするのは、序数としての名詞化された形容詞である。例えば、『der Erste und der Letzte, der Nächste, jeder Dritte 等)。また不定代名詞と共に立つ不定の数を表す形容詞、例えば、『alles Übrige, nicht das Geringste』。または例えば『im Klaren, im Folgenden, im Nachhinein, des Näheres, 一言葉通りの意味でも、誇張的な意味で使われた場合でも— im Dunkeln tappen, im Trüben fischen』など、かたく結びついた慣用句の結合の中の形容詞である。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|----------------------|---|----------------------|
| der, die, das letzte | → | der, die, das Letzte |
| der nächste, bitte | → | der Nächste, bitte |
| alles übrige | → | alles Übrige |
| nicht das geringste | → | nicht das Geringste |
| im großen und ganzen | → | im Großen und Ganzen |
| des näheren | → | des Näheren |
| im allgemeinen | → | im Allgemeinen |
| es ist das beste | → | es ist das Beste |

(am besten, wenn…) も同じである

4-4. 句読法と文綴法

句読法の中で最も本質的な新しい規則は、コンマである。強調しておかねばならないケースが二つある。『und』の後のコンマは、たとえ二つの完全な、互いに関連のない文が並んでも、いつも脱落する。不定詞句や分詞句では、コンマが置かれるのは、(1)ただ指示する語句でそれら不定詞句や分詞句が通達される場合、(2)再び言い直される場合、(3)通常の文構造の中からはずされる場合だけである。具体例を示す。

- (1)の場合: Darüber, bald zu einem Erfolg zu kommen, dachte sie lange nach
 (2)の場合: Bald zu einem Erfolg zu kommen, das war ihr sehnlichste Wunsch.

(3)の場合：Sie, um bald zu einem Erfolg zu kommen, schritt alsbald zur Tat.

音綴（発音上自然に区切れる音節）も一般的に行末の文綴とみなされる。それで特に『st はいつでも文綴させない』という現行の規則（ドイツ語圏の国語教師は誰でも『st を決して分けてはイケません。だって痛がるから。』と教えている。）が廃棄される。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|---------|---|---------|
| We-ste | → | Wes-te |
| Ka-sten | → | Kas-ten |
| Mu-ster | → | Mus-ter |

同じように『ck』も文綴の場合に、もはや『kk』で書き換えられない。これまでは、例えば、『Zuk-ker』と文綴した。語幹をいつも同じ書き方をするという意味で、『ck』は保持され、続いて次の行に進む。つまり、『Zu-cker』となる。（これまで『Kü-che, wa-schen』と文綴されていたのと似ている。）

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|---------|---|---------|
| Zuk-ker | → | Zu-cker |
| Lek-ken | → | Le-cken |
| Bak-ke | → | Ba-cke |

筆者にとって重要に思われることは、現行の規則で外国語の国の起源を示す働きをしている外国語の文綴方法に対して、新規則では、ドイツ語起源の語の語幹保持に当てはまる文綴方法も使用できることになる。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|-------------|---|------------------------------|
| Chir-urg | → | Chir-urg もしくは Chi-rurg |
| Si-gnal | → | Si-gnal もしくは Sig-nal |
| Päd-agogik | → | Päd-agogik もしくは Pä-dagogik |
| Par-allel | → | Par-allel もしくは Pa-rallel |
| Heliko-pter | → | Heliko-pter もしくは Helikop-ter |

語頭にあるたったひとつの母音は、文綴してはならないという規則は廃棄される。

| 現行の書き方 | | 新しい書き方 |
|--------------|---|--------|
| Ufer(文綴できない) | → | U-fer |
| Ofen(文綴できない) | → | O-fen |

V 期限、費用、有効性について

オーストリアとスイスではドイツ語正書法改正は、すでに1994年に管轄の審議会で議決された。ドイツでは、上述したように、さまざまな側からの抵抗のため、やっと1995年の12月になって議決された。州文部大臣全国会議の決議は、12月14日に州総理大臣の全国会議で承認された。この理由で正書法改正は、計画されたように1997/98年の学校年の開始とともにではなく、1998年8月にやっと導入されることになっている。

7年間の移行期間が合意された。これは一方では住民の習慣を変えることに對する不安を和らげるためである。他方、ある就学年の世代全員が突然書き方の習い方を変えなくてもよいようにするためである。2005年までに学校では現行の規則は、ただ旧の書き方として教えられるが、決して間違っただけとは位置付けられない。しかしこれは、全住民が新しい書き方へ変わることを妨げない。また少ししか記憶力がなかったり、新しい規則へ対応力がない人も、新規則を学ぶ苦勞をまだ忘れていない人も、公的な論議の場で表明された(必ずしも公開の席でなくとも)反感や不安に対して少しは理解をもてるだろう。移行期間の延長は特別の費用をかけなくても改正を実施することを可能にしよう。それとともに教科書も通常の改定の周期で改定されよう。国語関係の教科書の例外が、版の組み替えの時になって初めて新しい正書法を考慮させよう。また申し込み用紙など書式の決まっている印刷物も簡単に使い切ってしまうだろう。

ドイツ語正書法改正が規定としての性格を持つのは、学校や官庁など国家が何か規定しなければならない分野だけである。個人は、自分の書く習慣に対して官庁から告訴されたりはしない。すでにかなり前から穩健に、あるいは過激

(27) 当初は2～3年と考えられていた。

に小文字書きを信奉しているアヴァンギャルドたちは、これからも当局を恐れなくてもよい。

正書法改正がテキストの書き方にそれほど大きな変更を引き起こさないよう期待されている。統計的には、通常のテキストに現れるすべての単語の3%以上は変わらないだろうと⁽²⁸⁾いってよかろう。そしてそのかなりの部分は（およそ1%）が、『daß→dass』になろう。

(28) H. チンマーマンは彼の記事の中で語っている。注の(13)参照。

DIE DEUTSCHE RECHTSCHREIBREFORM

Geschichte, Hintergründe, Regeln¹

von Kazuyuki Takigawa und Klaus Peter Knoll

“Wer ist mir Duden und was bin ich ihm, daß er mir sollte gelten?”²

1. Geschichte

Die deutsche Orthographie war bis gegen Ende des vorigen Jahrhunderts weitgehend dem Gutdünken des Einzelnen überlassen. Die regionalen Besonderheiten des Mittelalters vermitteln mitunter den Eindruck, man habe es mit mehreren Sprachen zu tun. Einige kurze Beispiele mögen die Freiheiten in der Rechtschreibung des Frühneuhochdeutschen illustrieren:

JANSEN ENIKEL: Weltchronik (um 1280, Anfang)³

Die diutsch sprâch ist diu dritt zung
in irer ordenung,
diu kan niht kristenlicher sîn
die Diutschen sitzent umb den Rîn
enmitten in der Swâben lant;
dâ ist diu diutsch zung erkant.

Die deutsche Sprache ist die dritte
in der Ordnung,
die könnte nicht christlicher sein.
Die Deutschen sitzen am Rhein,
mitten im Land der Schwaben,
dort spricht man deutsch.

1 Die Kapitel 1, 2, 3 und 5 stammen von K. P. Knoll, die Einleitung der Japanischen Fassung (dort Kap. 0) und das Kapitel 4 (Regeln) stammen von K. Takigawa, der auch die Übersetzung ins Japanische besorgte.

2 Friedrich Torberg: “Kaffeehaus war überall”. Langen Müller, München u. Wien, 1982, S. 76

3 Dieses und die folgenden drei Beispiele aus: “Die deutsche Literatur. Ein Abriß in Text und Darstellung.” Bd 2: “Mittelalter II”, Hrsgg. von Hans Jürgen Koch, Reclam, Stuttgart 1982, hier S. 39

NICOLAUS VON JEROSCHIN : Krönike von Prūzinlant (ca. 1330, Ende)⁴

Nû hâb ich mit der gotis hant,
als ich mich dâ vor vorbant,
di cronke von Prūzenlant,
als ich si zu latine vant,
zu dûtsche schribende volent,
mit tifen Worten nicht behent,
want si vornemen mac ein kint.

Nun habe ich mit Gottes Hand
so wie ich mich vor ihr fand
die Chronik von Preußen
wie ich sie lateinisch vorgefunden
auf deutsch schreiben wollen,
mit großen Worten nicht geübt
wie ein Kind es machen würde.

HEINRICH SEUSE : Der Seuse (1362, Anfang)⁵

Hie vahet an daz erste tail dizz bu'ches, daz da haisset der Suse.
Es waz ein brediger in tûtschem lande, von geburt ein Swabe, dez nam geschriben
sie an dem lebenden bu'ch.

Hier beginnt der erste Teil des Buches, welches heißt "Der Seuse".

Es lebte ein Prediger in Deutschland, von Geburt ein Schwabe, dessen Name soll in
dem lebendigen Buch geschrieben stehen.

HANS SCHILTBERGER : Reisebuch (ca. 1440, Heimkehr)⁶

Und cham dornach mer zu einer stat, die haist Sedschopff und ist hauptstadt in der
clainen Walachei. Ich cham auch dornach zu ainer stadt, haist in teutzsch Lempurgk...

Danach kam ich zu einer Stadt namens Sedschopf, die ist Hauptstadt der Kleinen
Walachei. Ich kam danach zu einer Stadt, die auf deutsch Lemburg heißt...

Schon bei oberflächlicher Betrachtung dieser Textstellen fallen die vier
unterschiedlichen Schreibweisen für Muttersprache bzw. Vaterland auf :

diutsch-dûtsch-tûtsch-teutzsch

Schiltbergers Text, schon ganz Neuhochdeutsch, böte nicht nur heutigen
Sprachpolizisten reichlich Gelegenheit zur Beobachtung einer freieren
Schreibweise : stat und stadt, es haist (= heißt) und haysset, ein und ain
usw.

4 ebd. S. 43

5 ebd. S. 54

6 ebd. S. 64

Das Frühneuhochdeutsche zeigt noch deutlich seine Herkunft aus teilweise ganz verschiedenen Dialekten, jedoch gibt es von Anfang an einen starken Bedarf an Vereinheitlichung und Systematisierung. Als im 13. und 14. Jahrhundert in Verwaltung und Rechtsprechung schriftliche Urkunden allgemein üblich werden, gehen von den fürstlichen Kanzleien wichtige Impulse zur schriftsprachlichen Einheit aus. Gutenbergs Erfindung des Buchdrucks um die Mitte des 15. Jahrhunderts treibt die Entwicklung weiter voran. Den stärksten Impuls setzt jedoch Martin Luthers Bibelübersetzung von 1534 (“Biblia, das ist die gantze Heilige Schrift”). In ihrer Mischung von oberdeutschen und ostmitteldeutschen Elementen ist sie vielen Lesern zugänglich, ihr variationsreicher Stil macht sie auch zu einem Sprachkunstwerk. Die Lutherbibel erlangt Verbreitung durch alle Regionen und Stände des deutschen Reiches wie kein Text davor und nur wenige danach. Ihre einigende Wirkung auf das Neuhochdeutsche kann kaum überschätzt werden.

Die Tätigkeit der Sprachgesellschaften des 17. Jahrhunderts, insbesondere die Herausgabe von Wörterbüchern, trägt zwar einerseits viel zur Vereinheitlichung der Orthographie bei, treibt mitunter jedoch auch seltsame Blüten. Das Bemühen, Dialekt- und insbesondere fremdsprachige Einflüsse auszumerzen, ermangelt nicht skurriler Vorschläge wie “Gesichtserker” für Nase (lateinisches Lehnwort) oder “Meuchelpuffer” für Pistole (französisches Lehnwort). Wieland, Lessing und Goethe setzen mit ihrer literarischen Arbeit das mitteldeutsche Idiom allgemein durch, die Rechtschreibung bleibt jedoch weiterhin für viele Varianten offen.

Das Deutsche Wörterbuch der Brüder Grimm ist der monumentale Versuch einer umfassenden Bestandsaufnahme des deutschen Wortschatzes ab dem 16. Jahrhundert. Jacob und Wilhelm Grimm beginnen es etwa 1838. Das Unternehmen wächst sich jedoch gewaltig aus: Erst 1854 ff. erscheinen die

ersten Bände, vollendet wird es 1961, ziemlich genau hundert Jahre nach ihrem Tod, und ist heute von überwiegend historischem Wert. Das Grimmsche Wörterbuch ist durchaus nicht als Normierungsversuch zu sehen, sondern als Sammlung und Ordnung des Vorhandenen: Jeder Eintrag wird mit (oft Dutzenden) Fundstellen belegt. Es blieb einem gänzlich anderen Geist vorbehalten, die Rechtschreibung in eine Norm zu bringen. Konrad Duden's "Vollständiges Orthographisches Wörterbuch der deutschen Sprache"⁷ wird allgemein als Wegbereiter der deutschen Einheitsrechtschreibung gesehen. Dabei kann sich der schmale Band mit seinen 187 Seiten kaum zu dieser Aufgabe geeignet haben. Erst die Erben seiner Bemühungen, das Bibliographische Institut Mannheim, das aus dem Namen des Philologen ein amtlich geschütztes Warenzeichen machte, darf sich dieses Erfolgs rühmen. Er wäre freilich ohne das Obrigkeitsdenken der wilhelminischen Zeit nicht vorstellbar. So fügt es sich gut in dieses Bild, daß die "amtliche deutsche Rechtschreibung" auf der 2. Orthographischen Konferenz 1901/02 in Berlin beschlossen wird. Mir ist kein anderes europäisches Land bekannt, das über eine *amtliche* Rechtschreibung verfügt. In Japan allerdings gibt es seit 1946 etwas Ähnliches: Die Liste der knapp 2000 Tojo-Kanji, mit denen jede japanische Veröffentlichung ihr Auslangen finden soll, wurde von der Regierung auf dem Erlaßweg bekanntgemacht. Im Jahr 1955 (Konrad Duden ist seit 44 Jahren tot) wird *Der Duden* durch Beschluß der deutschen Kultusminister verbindliche Grundlage der "amtlichen deutschen Rechtschreibung".

Seither gab es nur einzelne, unsystematische Neuregelungen durch die Duden-Redaktion, die sogenannte "Fortschreibung".

7 Mannheim, 1880

2. Hintergründe der Reform

Es ist wohl kein Zufall, daß in der Zeit der antiautoritären Bewegung, der Studentenrevolution etc. auch die Rechtschreibung ab etwa 1970 ins Schußfeld der Kritik geriet. Die Forderungen entbehrten durchaus nicht ihrer Berechtigung: Allzu lange war "richtig Schreiben" mit Intelligenz und Charakterstärke in eins gesetzt worden. Die unsystematisch und von Fall zu Fall getroffenen Entscheidungen der Duden-Redaktion, die auch nur im Nachhinein absegnen konnten, was zuvor schon allgemeiner Usus geworden war, hatten das Regelwerk unübersehbar und für den Normalverbraucher unbeherrschbar gemacht. Heute sind m. E. nur versierte Sekretärinnen und Korrektoren in der Lage, einen Schriftsatz "dudenkonform" zu gestalten, während der Großteil aller Texte (jene von Journalisten, Politikern, Kulturkritikern etc. keineswegs ausgenommen) durchaus korrekturbedürftig ist. 312 Regeln, ungezählte Ausnahmen, dazu die Vorschriften für Satz und Druck: wer möchte das im Kopf behalten?

Ein kurzer Test kann vielleicht illustrieren, was ich meine: ⁸

- i) Wo teilen Sie *Sigle*, *Sigma*, *Signatur*, wo *Morgue*?
- ii) Sind folgende Schreibungen zulässig: *Fotografie*, *Orthografie*, *Grammofon*, *Mikrofon*, *Oxid*, *Scharm*?
- iii) Was schreiben Sie hier groß, was klein: er tappt in dieser Frage *im dunkeln*. Nach dem Stromausfall saßen wir *im dunkeln*. *Mit bezug auf* - *in bezug auf*. *Er fährt auto* - *Er fährt rad*?
- iv) Welche Schreibung ist richtig: *Schiffahrt*, *Schiff-fahrt*, *Sauerstoffflasche*? usw. ad libidum.

Für eine bestimmte Sorte Lehrer - den sadistschen und den überheblichen

⁸ Auflösungen am Ende des Beitrags.

Typ (“*Bei mir* hätte auch Goethe höchstens ein Gut bekommen!”⁹) muß ein derartiges “Regel”werk ein Vergnügen sein, für einen Menschen, der mit Geschriebenem hauptsächlich etwas mitteilen möchte, könnte sich eine ganz andere Beurteilung der Arbeit der Dudenredaktion ergeben.

Da es sich jedoch bei der deutschen Sprache - im Unterschied etwa zu Englisch oder Italienisch - um heiliges Kulturgut¹⁰ handelt, dauerte es nicht lange, bis “Traditionalisten” und “Revolutionäre” einander erbittert gegenüberstanden und jegliche weitergehende Reform blockierten.

Daß von den ersten Tagungen bis zur Einführung der Reform 1998 ganze 19 Jahre vergangen sein werden, läßt schon etwas ahnen von den Kämpfen, die das Unternehmen heraufbeschworen hat. Die Fronten waren nicht immer übersichtlich. Die Schweiz ließ von Anfang an wissen, daß sie nicht beabsichtige, “ß” als Regelbuchstaben einzuführen, die Dudenredaktion hätte das ganze Unternehmen gern in ihre Obhut gebracht, der deutsche PEN hätte am liebsten eine Sprachakademie nach französischem Vorbild gegründet, die Philologen im Internationalen Arbeitskreis für Orthographie sprachen sich zunächst für die sogenannte “gemäßigte” Kleinschreibung aus (d. h. nur Eigennamen und Satzanfänge groß), die Politiker teilten mit, daß das keinesfalls in Frage käme, kümmerten sich aber nicht weiter um die Angelgenheit, usw. usf.

1980 wurde in Basel der Internationale Arbeitskreis für Orthographie gegründet. Ihm gehören/gehörten Wissenschaftler aus der BRD, der DDR,

9 Ausspruch des Welser Gymnasiallehrers Franz Seidlmayr in den 70er Jahren, der durch irritierte Eltern eine gewisse lokale Berühmtheit erlangte. In der Sache hatte der Herr Professor allerdings völlig recht: Goethe und Duden - das geht nicht zusammen.

10 Wie etwa auch in Frankreich, das sich mit der Forderung, alle Anglizismen aus der Alltagssprache zu verbannen, über die Grenzen Europas hinaus lächerlich gemacht hat. Der Versuch, Wörter wie “Computer” amtlicherseits zu verinländischen, kommt wohl mehrere Jahrzehnte zu spät

der Schweiz und Österreich an. Auf acht internationalen Tagungen¹¹ wurden in Zusammenarbeit mit nationalen Forschungsgruppen¹² Vorschläge zur Rechtschreibreform erarbeitet. 1985 und 1988/89 wurden die jeweiligen Vorschläge veröffentlicht.^{13 14} Insbesondere in der BRD entfesselten die Vorschläge des Jahres 1988/89 einen Sturm der Entrüstung. Die Kritik entzündete sich an neuen Schreibungen, bspw. "Keiser" statt "Kaiser", ebenso wie am Vorschlag einer gemäßigten Kleinschreibung.

Neben den Fachtagungen gab es seit 1986 auch Gespräche auf politischer Ebene über die Rechtschreibreform.¹⁵ Die 1992 veröffentlichten Vorschläge des Internationalen Arbeitskreises für Orthographie wurden in Deutschland, Österreich und der Schweiz einem politischen Begutachtungsverfahren unterzogen, überarbeitet und auf der Wiener Konferenz im November 1994 beschlossen. Die jeweils zuständigen politischen Instanzen Österreichs und der Schweiz verabschiedeten die Reform noch im selben Jahr. In Deutschland kam es jedoch kurz vor Beschluß der Rechtschreibreform durch die Konferenz der Kultusminister zu einem Eklat.¹⁶ Der bayrische Kultusminister Hanz Zehentmayr ließ wissen, daß er für Nebenformen wie "Apotheke" (neben der Hauptschreibung "Apotheke") oder "Zellofan" (neben

11 1982 und 1989 in Wien, 1984 und 1988 in Rostock, 1986 und 1990 in Mannheim, 1987 in Zürich und 1991 in Rorschach

12 Kommission für Rechtschreibfragen des Instituts für Deutsche Sprache, Mannheim; Forschungsgruppe Orthographie der Universität Rostock und des Zentralinstituts für Sprachwissenschaft, Berlin; Wissenschaftliche Arbeitsgruppe des Koordinationskomitees für Orthographie beim BMUK, Wien; Arbeitsgruppe Rechtschreibreform der schweizerischen Konferenz der kantonalen Erziehungsdirektoren, Bern.

13 "Die Rechtschreibung des Deutschen und ihre Neuregelung". Hrsgg. v. d. Kommission für Rechtschreibfragen des Instituts für Deutsche Sprache, Mannheim. Düsseldorf 1985 (= Sprache der Gegenwart, Bd. 66)

14 "Vorschlag zur Neuregelung der deutschen Rechtschreibung." Hrsgg. v. d. Kommission für Rechtschreibfragen des Instituts für Deutsche Sprache, Mannheim. Düsseldorf, später Berlin 1989 (= Sprache der Gegenwart, Bd. 77)

15 Die sogenannten "Wiener Gespräche", 1986, 1990 und 1994

16 vgl. auch das folgende Kapitel.

“Zellophan, fachsprachlich Cellophan”) oder gar “Tron” statt “Thron” und “heiliger Vater” statt “Heiliger Vater” keinesfalls die Verantwortung übernehmen könne. Das ebenfalls katholische Österreich und die Schweiz, die den Vorschlag schon abgesegnet hatten, reagierten leicht verärgert. Dennoch: Die Reform mußte nochmals reformiert werden, bevor im Dezember vorigen Jahres auch die Kultusminister der CDU-Länder ihre Zustimmung geben konnten.

3. Meinungen

In den beiden Monaten vor dem Beschluß durch die Kultusministerkonferenz fand die Rechtschreibreform plötzlich auch das Interesse der Öffentlichkeit. Von September bis Dezember vorigen Jahres erschienen in der Tages- und Wochenpresse mehrere hundert wenn nicht tausende Artikel zum Thema Rechtschreibreform. Es ist kaum eine Meinung vorstellbar, die nicht geäußert worden wäre. Ich greife einige besonders qualifizierte - und einige besonders unqualifizierte - heraus. Aufgrund der Aktualität des Themas und der langen Beschaffungszeiten von Japan aus stammt ein Teil des im folgenden zitierten Materials aus dem Internet. Da es überwiegend dem Zweck der Illustration dient, wurde die etwas unsichere Reproduzierbarkeit dieser Art elektronischer Quellen hier in Kauf genommen.

14. September 1995

CDU-Vorbehalte aus den Ländern verzögern Rechtschreibreform

Die mit Österreich und der Schweiz abgestimmte Reform der deutschen Rechtschreibung droht auf zunächst unbestimmte Zeit verschoben zu werden. Die CDU in fünf Landesparlamenten hat heute erhebliche Vorbehalte gegen den von einer Expertenkommission bereits Ende 1994 in Wien vereinbarten neuen Regelkatalog für die deutsche Sprache angemeldet. Für das Reformwerk ist auf deutscher Seite

neben der Kultusministerkonferenz das Bundesinnenministerium zuständig (...) In ihrem Schreiben, dessen Entwurf schon am Mittwoch in Saarbrücken bekannt geworden war, argumentieren die CDU-Politiker, eine Rechtschreibreform in der geplanten Form bedürfe der politischen Legitimation. Da die Kulturhoheit bei den Ländern liege, könne es eine so weitreichende Veränderung der deutschen Sprache nur nach Zustimmung der Länderparlamente und Abschluß eines Staatsvertrags geben.

Für den rheinland-pfälzischen CDU-Fraktionschef Böhr ist die Reform nach dem Vorstoß aus seiner Partei "zumindest in diesem Jahr gestorben". Der niedersächsische Kultusminister Rolf Wernstedt (SPD) ist dagegen dazu bereit, die Reform zu unterschreiben. Eine Zustimmung der Länderparlamente hält er für nicht notwendig, weil diese über die Reform in der Sache ohnehin nicht befinden könnten.¹⁷

Eine faszinierende Vision der Kulturhoheit drängt sich hier auf: In Bayern schriebe man "Mia san mia", in Berlin etwa: "Ick hap dir doch jesacht"...

Ex-Kultusminister Gölter: Rechtschreibreform ist erledigt

Mainz (dpa) - Die Reform der deutschen Rechtschreibung ist nach Einschätzung der früheren rheinland-pfälzischen Kultusministers Georg Gölter (CDU) gescheitert. "Wer die Reform jetzt anhält, weiß, daß sie nicht kommt. Das Thema ist erledigt", sagte Gölter gestern abend der dpa in Mainz. Er könne nicht nachvollziehen, daß die Beteiligten jetzt eine neue Diskussion entfachten, sagte der CDU-Politiker, der als Minister für die Reform gekämpft hatte. Aus Bayern, Thüringen und Nordrhein-Westfalen sind wenige Wochen vor der geplanten Verabschiedung Änderungswünsche laut geworden.¹⁸

PEN-Präsidentin Ingrid Bacher gegen Rechtschreibreform

Berlin/Düsseldorf (dpa) - Entschieden gegen die geplante Rechtschreibreform hat sich die Präsidentin des westdeutschen PEN-Zentrums, Ingrid Bacher, ausgesprochen. In einem Beitrag für die Berliner Tageszeitung "Die Welt" warnte die Düsseldorfer Autorin vor einem Verlust sprachlicher Identität und historischen

17 EMP = Electronic Media Publishing, am 4.9.1995: <http://www.germany-live.de>

18 EMP, 20.9.1995

Bewußtseins.¹⁹

Wie ja auch Italien seiner sprachlichen Identität verlustig ging, als man dort anfang, *fisica* zu schreiben statt *physica*...

*In den einzelnen Bundesländern haben sich die Kabinette zum Teil noch nicht mit der Rechtschreibreform befaßt, wie eine dpa-Umfrage ergab.*²⁰

Woraus man schließen könnte, die Rechtschreibreform wäre eine Art Bürgerinitiative, wo doch in Wirklichkeit die diversen politischen Gremien ihre Beamten ständig in den mit der Reform beauftragten Gremien sitzen hatten.

*Bonn (dpa) - Die Präsidentin der Kultusministerkonferenz Rosemarie Raab (SPD) ist zuversichtlich, daß die umstrittene Rechtschreibreform noch in diesem Jahr beschlossen wird. "Ich gehe davon aus, daß die Kultusministerkonferenz der vorgeschlagenen Neuregelung der deutschen Rechtschreibung zustimmen wird", sagte die Hamburger Schulsenatorin dem "Bonner General-Anzeiger" (Freitagsausgabe). Die Kultusminister tagen am 30. November. Vorbehalte ihrer Kollegen gegen die Neuregelung wies die Senatorin zurück. Sie trafen nicht den Kern der Reform. "Die Neuregelung verzichtet auf eine Fülle von Sonder- und Ausnahmeregeln, die selbst kompetente Schreiber kaum mehr überschauen."*²¹

Vgl. dazu auch den eher harmlosen Test in Kap. 2.

Dreizehn Jahre Streß

Das Getöse um die unselige Rechtschreibreform - der Teufel soll sie holen! - hat die jüngste Sitzung der Kultusminister-Konferenz derart dominiert, daß deren

19 EMP, 28. 9. 1995

20 dpa-Meldung 28. 9. 1995

21 dpa Meldung 6. 10. 1995

*wichtigere Entscheidung darin beinahe unterging : Beim Abitur bleibt alles, wie es war, oder doch fast alles.*²²

Das ist ja nun wirklich eine qualifizierte und fachlich gut begründete Meinung. Dazu paßt hervorragend die Idee des Bamberger Sprachwissenschaftlers Helmut Glück :

Es geht nicht an, daß auch künftig die Probleme, die Schulkinder beim Schreiben lernen haben, Richtschnur für orthographische Neuerungen sind.

*Es wäre fatal, wenn die fälligen Entscheidungen in Mannheimer Hinterzimmern ausgeheckt würden. Sie müssen nach einer öffentlichen Diskussion über die Aufgaben und die Kompetenzen der neuen Hüter unserer Orthographie fallen. Die fachlich Besten müssen damit beauftragt werden, die weitere Entwicklung unserer Rechtschreibung forschend zu begleiten, und gebildete Leute, die als Schriftsteller, Journalisten, Wissenschaftler und Politiker Kreativität und Kompetenz im Umgang mit unserer Sprache bewiesen haben, sollten künftig Entscheidungen über orthographische Änderungen treffen.*²³

Und als Vorsitzenden dieser Kommission wünschen wir uns einen Leitartikel der Süddeutschen Zeitung... Prof. Glück macht freilich auch berechtigte Bedenken geltend :

Einiges Unbehagen bleibt. Unter den Sprachwissenschaftlern gibt es kaum jemanden, der der Reform ohne Vorbehalte zustimmt. Die Skepsis betrifft weniger die Neuerungen bei Einzelwortschreibungen, zum Beispiel "behände" oder "Flussand". Gravierender ist, daß einige gut funktionierende grammatische Mechanismen der Orthographie zerstört werden. Künftig werden nämlich Schreibungen wie "Sie pflegte, zu joggen" oder "Ich rate ihnen ernsthaft zu helfen" korrekt sein. Viele komplexe Verben werden auseinandergerissen, zum Beispiel "Staub saugen" oder "gefangen nehmen". Die grammatisch sinnvolle und leserfreundliche Schreibung "daß" wird durch "dass" ersetzt - Schulkinder werden deshalb an diesem Punkt

22 Rainer Stephan, Süddeutsche Zeitung vom 5. 12. 1995, Leitartikel

23 Die Welt, 13. 12. 1995

*keinen Fehler weniger machen.*²⁴

Es gab auch belebendere Meldungen wie etwa die folgende :

Rechtschreibreform verfassungswidrig ?

*Rechtsexperte Ehard Denninger haelt die geplante Rechtschreibreform fuer verfassungswidrig. Wesentliche Eingriffe in Grundrechte duerften nicht von einer Ministerrunde getroffen, sondern muessten vom Parlament beschlossen werden, so Denninger zum Spiegel.*²⁵

Das Grundrecht auf freie Rechtschreibung ! Freie Fahrt für freie Bürger ! Vgl. auch den ersten hier zitierten Beitrag vom 14. 9. 1995. Insgesamt fällt auf, daß sich just um die Zeit der jeweiligen Sitzungen der Kultusminister die polemischen Artikel häufen. Ein typisches Beispiel sei, nicht zuletzt, weil es bedeutend mehr Witz zeigt als die meisten, hier auszugsweise wiedergegeben :

Allen, denen diese Reform nicht weit genug geht, schlage ich folgenden Stufenplan zur deutschen Rechtschreibreform vor :

1. *abschaffung der großschreibung. andere sprachen kommen auch gut mit der kleinschreibung zurecht.*

(..)

3. *abschaffung aller nationalen sonderzeichen. das 'ß' wird zum 's', die umlaute 'ö', 'ü' zu 'o', 'u' und 'ä' wird zu 'e'.*

(..)

5. *denlaute wi das denungs- 'e', wokalferdoppelungen oder das 'h' hinter dem wokal sten uns nur im weg, auf di konnen wir wol gut ferzichten.*

(..)

10. *das 'sch' ausgesprochen 'g' wird so geschrieben, wie gesprochen. beispiel : manesche schtatt Manege.*

(..)

²⁴ ebd.

²⁵ German News-WebZine @ Xculture, undatiert

13. *di Kommasetzung ist so kompliziert das si sowiso kainer ferstet deshalb lassen wir kommate in zukunft einfach weg.*²⁶

Text dieser Art geistern mindestens seit Mitte der 70er Jahre durch die Medien, sind aber meist in einem Grad verbiestert, daß sie wohl nur noch selten Diskussionen auslösen.

Eine der nicht allzuzahlreichen wohlabgewogenen Meinungen findet sich in einem ausführlichen Artikel von Prof. Harald H. Zimmermann:

*Wenn die Reform auch nicht der "große Wurf" ist, den manche erwartet haben, so muß sie sich doch auch nicht verstecken: sie ist deutlich mehr als eine "Fort-schreibung" von Schreibformen, wie sie bei jeder Auflage des DUDEN schon seit Jahren vorgenommen wird.*²⁷

4. Die Neuregelung im Überblick

Größere Probleme bereiteten in der alten Rechtschreibung insbesondere die Kennzeichnung der Vokallänge und -kürze, die Schreibung von Fremdwörtern, die Zusammen- und Getrennschreibung sowie die Groß- und Kleinschreibung.

In allen o. g. Punkten bringt die Rechtschreibreform Vereinfachungen und etwas konsistentere Regeln.

4.0 Allgemeines

Als Grundsätze werden eine "behutsame" Vereinfachung" und das "Stammprinzip" genannt. "Behutsam" ist hier freilich ein Euphemismus, der die teilweise Inkonsistenz, das politische Gerangel und was zugunsten der

26 Darmstädter Echo, 30. 11. 1995 (Tag der Sitzung der Kultusministerkonferenz), S. 3

27 "Rechtschreibreform-Vereinfachung oder Verunsicherung?", Süddeutsche Zeitung, 26. 11. 1995

Durchsetzbarkeit lückenhaft bleiben mußte, verdeckt. Das “Stammprinzip” hat zum Ziel, die gleiche Schreibung eines Wortstammes möglichst in allen Wörtern einer Wortfamilie sicherzustellen. Entscheidungskriterium soll dabei sein, ob ein Wort im heutigen Sprachgebrauch einer Wortfamilie zugeordnet wird oder nicht, was freilich nicht minder verwaschen ist, als manche Regelung der Duden-Redaktion. Den Stamm “Hand” zu “behende” bspw. erraten mitunter auch ausgefuchste Germanisten nicht.²⁸

4.1 Laute und Buchstaben (inkl. Fremdwortschreibung)

Einschneidende Maßnahmen, die das historisch gewachsene Schriftbild der deutschen Sprache verändern würden, sind nicht vorgesehen. Frühere Vorschläge scheiterten regelmäßig auch daran. Die neue Regelung konzentriert sich darauf, Verstöße gegen das Stammprinzip zu beseitigen.

4.1.1

Einzelfälle mit Umlautschreibung

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|-------------------------|----------------------------------------|
| behende | behände (zu Hand) |
| belemmert | belämmert (heute zu Lamm) |
| Bendel | Bändel (zu Band) |
| Gemse | Gämse (zu Gams) |
| Quentchen | Quäntchen (heute zu Quantum) |
| schneuzen | schnäuzen (zu Schnauze, großschnäuzig) |
| Stengel | Stängel (zu Stange) |
| überschwenglich | überschwänglich (zu Überschwang) |
| verbleuen | verbläuen (heute zu blau) |
| <u>aber weiterhin :</u> | Eltern (trotz alt) |

28 So das Mitglied der Duden-Redaktion Prof. Günther Drosdowski im Spiegel Interview. In: Der Spiegel 25/1995

4.1.2

Einzelfälle mit Verdoppelung des Konsonanten nach kurzem Vokal

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|----------------------------|
| Karamel | Karamell (zu Karamelle) |
| numerieren | nummerieren (zu Nummer) |
| plazieren (placieren) | platzieren (zu Platz) |
| Stukkateur | Stuckateur (zu Stuck) |
| Tolpatsch | Tollpatsch (heute zu toll) |

4.1.3

ss für ß nach kurzem Vokal

Zur Sicherstellung der gleichen Schreibung der Wortstämme wird auch der Wechsel von ss zu ß nach kurzem Vokal aufgehoben und konsequent ss geschrieben, also Wasser/wässerig/wässrig oder müssen/er muss.

Hingegen bleibt ß in Wörtern wie Maß, Muße und Straße erhalten und kennzeichnet nunmehr eindeutig die Länge des vorausgehenden Vokals oder einen Doppellaut vor stimmlosem s-Laut (draußen, beißen).

Die Konjunktion daß wird - entsprechend der allgemeinen Regel, daß nach kurzem Vokal ss steht - dass geschrieben. Damit bleibt die Unterscheidung gegenüber dem Artikel beziehungsweise dem Relativpronomen das erhalten.

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|-------------------------|
| hassen-Haß | hassen-Hass |
| küssen-Kuß, | küssen-Kuss, |
| sie küßten sich | sie küssten sich |
| lassen-er läßt | lassen-er lässt |
| müssen-er muß | müssen-er muss |
| Wasser-wässerig-wäßrig | Wasser-wässerig-wässrig |
| daß | dass |

4.1.4

Erhalt der Stammschreibung in Zusammensetzungen

Wenn in Zusammensetzungen drei gleiche Konsonantenbuchstaben zusammentreffen (Ballett+Truppe, Ballett+Tänzer), werden stets alle geschrieben, also nicht nur wie bisher in Fällen wie Balletttruppe, sondern auch in Fällen wie Balletttänzer (heute Ballettänzer, bei Trennung jedoch Ballett-tänzer). Die Schreibung mit Bindestrich ist immer möglich.

alte Schreibungneue Schreibung

Flanellappen

Flanellappen

Flußsand

Flusssand

Ballettänzer

Balletttänzer

Stoffetzen

Stoffetzen

aber weiterhin

dennoch, Drittel, Mittag

Entsprechend bleibt auch bei der Endung -heit ein vorausgehendes h erhalten: Rohheit (zu roh), Zähheit (zu zäh) statt Roheit und Zäheit. Neben selbständig ist auch selbstständig (selbst+ständig) möglich.

alte Schreibungneue Schreibung

Roheit

Rohheit (zu roh)

Zäheit

Zähheit (zu zäh)

Zierat

Zierrat (wie Vorrat)

selbständig

selbständig/selbstständig

4.1.5

Systematisierung in Einzelfällen

Die Schreibung von bisher *rauh* und *Känguruh* wird geändert zu *rau* (in einer etwas bedenklichen Analogie zu anderen Adjektiven auf -au wie *blau*, *grau*, *genau*, *schlau*) beziehungsweise zu *Känguru* (in Analogie zu anderen fremdsprachigen Tierbezeichnungen wie *Emu*, *Gnu*, *Kakadu*).

Entsprechend dem zugrundeliegenden Substantiv auf -anz oder -enz ist die Schreibung mit z (essenziell usw.) die Hauptform. Die bisherige Schreibung mit t (essentiell usw.) bleibt als Nebenform bestehen.

alte Schreibungneue Schreibung

essentiell

essenziell (zu Essenz), auch essentiell

Differential

Differenzial (zu Differenz), auch Differential

differentiell

differenziell (zu Differenz), auch differentiell

Potential

Potenzial (zu Potenz), auch Potential

potentiell

potenziell (zu Potenz), auch potentiell

substantiell

substanziell (zu Substanz), auch substantiell

4.1.6

Fremdwörter

Hier ist die Neuregelung aufgrund politisch-rechtlicher Widerstände²⁹ inkonsequent und unübersichtlich. Insbesondere die Lautgruppen -th- und -ph- konnten nicht einheitlich gelöst werden.³⁰ Es scheint, als habe man sich auf ein Konzept des "kleinsten gemeinsamen Nenners" geeinigt.

alte Schreibungneue Schreibung**ai****ai oder ä**

Frigidaire

Frigidaire, auch Frigidär (als Warenzeichen Frigidaire)

Necessaire

Necessaire, auch Necessär (in Analogie zu:

²⁹ vgl. Kap. 2 dieser Arbeit

³⁰ Im Beschlußantrag der Kommission heißt es dazu: "So läßt sich beispielsweise die in den Wortstämmen phon, phot und graph bereits vorhandene f-Schreibung auf weitere Beispiele ausdehnen. Auf eine forcierte Angleichung über diese Wortstämme hinaus wird jedoch verzichtet. Wörter wie Philosophie, Phänomen, Metapher oder Sphäre sollen weiterhin wie bisher geschrieben werden." In: "Deutsche Rechtschreibung. Regeln und Wörterverzeichnis. Vorlage für die amtliche Regelung". Hrsgg. Vom Internationalen Arbeitskreis für Orthographie. G. Narr, Tübingen, 1995

| | |
|-----------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| | Mohär, Sekretär etc.) |
| ph | ph oder f³¹ |
| quadrophon | quadrophon, auch quadrofon |
| Photometrie | Fotometrie, auch Photometrie |
| Geographie | Geographie, auch Geografie |
| Graphologe | Graphologe, auch Grafologe |
| Orthographie | Orthographie, auch Ortografie |
| Delphin | Delphin, auch Delfin |
| gh | gh oder g |
| Joghurt | Joghurt, auch Jogurt |
| Spaghetti | Spaghetti, auch Spagetti |
| é und ée | é/ée oder ee |
| Bouclé | Bouclé, auch Buklee |
| Exposé | Exposee, auch Exposé |
| Chicorée | Chicorée, auch Schikoree (vgl. Allee, Armee, Komitee, Resümee) |
| qu | k |
| Kommuniqué | Kommuniqué, auch Kommunikee (wie Etikett, Likör usw.) |
| ou | ou oder u |
| Bouclé | Bouclé, auch Buklee (wie jetzt schon Nugat) |
| ch | ch oder sch |
| Ketchup | Ketschup, auch Ketchup |
| Chicorée | Chicorée, auch Schikoree (in Analogie zu Anchovis, Broschüre, Haschee, retuschie- |

31 Hier ist die Neuregelung besonders inkonsequent, um nicht zu sagen, verwirrend. Warum einmal ph die Hauptform bildet (wie bei den Wörtern auf -graph), ein anderes Mal f (wie in den Wörtern mit -fot), ist nicht zu eruieren.

| | |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| | ren, Scheck usw.) |
| rh | rh oder r |
| Katarrh | Katarrh, auch Katarr |
| Myrrhe | Myrrhe, auch Myrr |
| c | c oder ss |
| Facette | Facette, auch Fassette |
| Necessaire | Necessaire, auch Nessessär (wie jetzt auch schon Fassade, Fasson, Rasse usw.) |
| th | th oder t |
| Panther | Panther, auch Panter |
| Thunfisch | Thunfisch, auch Tunfisch |

4.2 Getrennt-und Zusammenschreibung, Bindestrich

Verbindungen wie Auto fahren/ich fahre Auto, (aber bisher) radfahren/ich fahre Rad werden generell getrennt geschrieben. Eine Differenzierung der Schreibung nach inhaltlichen Kriterien wird zugunsten der Getrenntschreibung auch in den meisten anderen Fällen aufgegeben. Die Unterscheidung von konkreter und übertragener Bedeutung als Kriterium für Getrenntschreibung (auf dem Stuhl sitzen bleiben) beziehungsweise Zusammenschreibung (in der Schule sitzenbleiben im Sinne von nicht versetzt werden) wird aufgegeben, da dieses Kriterium schon bisher nicht funktioniert, wie die folgenden Beispiele zeigen: im Bett liegenbleiben (bisher zusammen trotz konkreter Bedeutung), mit seinem Plan baden gehen (bisher getrennt trotz übertragener Bedeutung "scheitern"). Gelten soll hier die konsequente Getrenntschreibung (bei geänderter Stellung ohnehin schon bisher: er blieb in der Schule sitzen). Aus dem Textzusammenhang heraus sind alle diese Fälle eindeutig zu verstehen. Dies geht konform mit der Neuregelung der Groß- und Kleinschreibung.³²

³² vgl. u. Kap. 4.3

alte Schreibung

radfahren

aber Auto fahren

teppichklopfen/Teppich klopfen

haltmachen

abwärtsgehen (schlechter werden)

aber abwärts gehen (einen Weg)

Wie bereits so viele, wie viele wird jetzt auch so viel, wie viel geschrieben :

alte Schreibung

soviel, wieviel

aber so viele, wie viele

Hingegen werden alle Verbindungen mit irgend - wie bisher schon irgendwer und irgendwohin - zusammengeschrieben :

alte Schreibung

irgend etwas,

irgend jemand,

aber irgendwer, irgendwannneue Schreibung

Rad fahren

(wie Auto fahren)

Teppich klopfen

Halt machen

abwärts gehen

abwärts gehen

neue Schreibung

so viel, wie viel

(wie : so viele, wie viele)

neue Schreibung

irgendetwas,

irgendjemand

(wie irgendwer, irgendwann)

Die Bindestrichregelungen werden gelockert, sodaß es jetzt dem Schreiben im Prinzip immer freisteht, einen Bindestrich zu setzen, wobei allerdings die Zusammenschreibung grundsätzlich weiterhin die Hauptform bildet.

alte Schreibung

Ichform, Ichsucht,

aber Ich-Laut

17 jährig, 3tonner

2pfünder

4 silbig, 100 prozentig

Kaffee-Ersatz

neue Schreibung

Ichform/Ich-Form, Ichsucht/Ich-Sucht

Ichlaut/Ich-Laut

17-jährig, 3-Tonner,

2-Pfünder

4-silbig, 100-prozentig

Kaffee-Ersatz/Kaffeersatz

| | |
|-----------------|--------------------------------|
| Hair-Stylist | Hairstylist/Hair-Stylist |
| Job-sharing | Jobsharing/Job-Sharing |
| Midlife-crisis | Midlifecrisis/Midlife-Crisis |
| Sex-Appeal | Sexappeal/Sex-Appeal |
| Shopping-Center | Shoppingcenter/Shopping-Center |

4.3 Groß- und Kleinschreibung

Ein leidiges Problem nicht nur der Schüler. Viele Jahrhunderte herrschte durchgängige Kleinschreibung. So kennt auch das Wörterbuch der Brüder Grimm bspw. die Großschreibung der Substantive noch nicht. Die Großschreibung hat insofern Sinn, als das Deutsche wesentlich mehr Möglichkeiten zur Substantivierung besitzt als andere Sprachen. Andererseits sagt man beim Sprechen auch nicht immer "Klick", wenn ein Substantiv oder ein substantiviertes Adjektiv folgt. Im Zuge der Vereinfachung der Rechtschreibung standen mehrere Varianten der Kleinschreibung zur Diskussion. Da die gemäßigte Kleinschreibung (d.i. Satzanfänge und Eigennamen groß, alles andere klein), zwar die Zustimmung Österreichs und der Schweiz gefunden hatte, letztlich aber am Widerstand Deutschlands scheiterte, wurde die m. E. nächstbessere Lösung gewählt, die freilich zu einer vermehrten Großschreibung führt. So werden Substantive in Verbindung mit einer Präposition (wie: auf Grund, in Bezug, mit Bezug etc.) oder einem Verb (z. B. Rad fahren, Tennis spielen) hinkünftig generell groß geschrieben.

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|------------------------|
| in bezug auf, | in Bezug auf |
| aber mit Bezug auf | (wie mit Bezug auf) |
| radfahren | Rad fahren |
| aber Auto fahren | (wie Auto fahren) |

Auch hier muß es als Inkonsequenz bezeichnet werden, daß einige Ausnahmen bestehen bleiben. So schreibt man insbesondere in Verbindung mit den Verben sein, bleiben und werden Wörter wie Angst, Bange, Gram, Leid, Schuld und Pleite weiterhin klein.

alte Schreibung

angst (und bange) machen

aber Angst haben

schuld geben

pleite gehen

neue Schreibung

Angst (und Bange) machen

Angst haben

Schuld geben

Pleite gehen

aber bange sein, gram bleiben, pleite werden
und insbesondere : Mir wird angst. Sie sind
 schuld.

Groß geschrieben werden substantivierte Adjektive als Ordinalzahlen (z. B. der Erste und der Letzte, der Nächste, jeder Dritte), den Indefinitpronomen nahestehende unbestimmte Zahladjektive (z. B. alles Übrige, nicht das Geringste) sowie Adjektive in festen Wortverbindungen (z. B. im Klaren, im Folgenden, im Nachhinein, des Näheren oder - bei Verwendung sowohl in wörtlicher als auch in übertragener Bedeutung - im Dunkeln tapen, im Trüben fischen).

alte Schreibung

der, die, das letzte

der nächste, bitte

alles übrige

nicht das geringste

im großen und ganzen

des näheren

im allgemeinen

es ist das beste

neue Schreibung

der, die, das Letzte

der Nächste, bitte

alles Übrige

nicht das Geringste

im Großen und Ganzen

des Näheren

im Allgemeinen

das Beste

(= am besten), wenn ...

4.4 Zeichensetzung und Worttrennung

Die wesentlichste Neuregelung bei der Zeichensetzung betrifft das Komma. Hervorzuheben sind zwei Fälle: Das Komma nach "und" kann immer entfallen, auch wenn es sich um zwei vollständige und voneinander unabhängige Sätze handelt. Bei Infinitiv- oder Partizipgruppen wird ein Komma nur noch gesetzt, wenn sie durch eine hinweisende Wortgruppe angekündigt (1) oder wieder aufgenommen werden (2), oder wenn sie aus der üblichen Satzstruktur herausfallen (3):

- (1) Darüber, bald zu einem Erfolg zu kommen, dachte sie lange nach.
- (2) Bald zu einem Erfolg zu kommen, das war ihr sehnlichster Wunsch.
- (3) Sie, um bald zu einem Erfolg zu kommen, schritt alsbald zur Tat.

Für die Worttrennung am Zeilenende gilt generell die Trennung nach Sprechsilben. So wird insbesondere die heutige Regel, st stets ungetrennt zu lassen ("Trenne nie st, denn es tut ihm weh!"), aufgehoben.

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|------------------------|
| We-ste | Wes-te |
| Ka-sten | Kas-ten |
| Mu-ster | Mus-ter |

Ebenso wird das ck bei der Worttrennung nicht mehr durch kk ersetzt (bisher Zuk-ker). Im Sinne der Beibehaltung der Stammschreibung bleibt ck erhalten und kommt geschlossen auf die nächste Zeile, also Zu-cker) ähnlich wie bisher schon Kü-che, la-chen und wa-schen).

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|------------------------|
| Zuk-ker | Zu-cker |
| lek-ken | le-cken |
| Bak-ke | Ba-cke |

Besonders wichtig scheint mir, daß für Fremdwörter neben den bsiher vorgeschriebenen Trennungen, die der Herkunftssprache Rechnung tragen (Chir-urg, Si-gnatur etc.), nun auch die für deutsche Stammwörter geltenden Trennregeln angewendet werden können.

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|-------------------------|
| Chir-urg | Chir-urg/Chi-rurg |
| Si-gnal | Si-gnal/Sig-nal |
| Päd-agogik | Päd-agogik/Pä-dagogik |
| par-allel | par-allel/pa-rallel |
| Heliko-pter | Heliko-pter/Helikop-ter |

Die Regelung, nach der ein einzelner Vokalbuchstabe am Wortanfang nicht abgetrennt werden darf, wird aufgehoben.

| <u>alte Schreibung</u> | <u>neue Schreibung</u> |
|------------------------|------------------------|
| Ufer (untrennbar) | U-fer |
| Ofen (untrennbar) | O-fen |

5. Termine, Kosten Gültigkeit

In Österreich und der Schweiz wurde die Rechtschreibreform schon 1994 von den zuständigen Gremien beschlossen, in Deutschland wegen der oben beschriebenen Widerstände verschiedener Seiten erst im Dezember 1995. Der Beschluß der Kultusministerkonferenz wurde am 14. Dezember 1995 von der Konferenz der Ministerpräsidenten gebilligt. Aus diesem Grund kann die Reform nicht, wie geplant mit Beginn des Schuljahres 1997/98 an den Schulen eingeführt werden, sondern erst im August 1998.

Es wurde eine Übergangsfrist von sieben Jahren vereinbart. Dies soll einerseits Ängste der Bevölkerung vor der Umgewöhnung mindern, andererseits verhindern, daß eine ganze Schülergeneration plötzlich umlernen muß. Bis zum Jahr 2005 darf in den Schulen die alte Schreibung nur als

überholt gekennzeichnet nicht jedoch als falsch gewertet werden. Dies ändert aber nichts daran, daß sich die gesamte Bevölkerung (zumindest, soweit sie noch Gedrucktes liest) wird umgewöhnen müssen. Wer jedoch ein wenig Erinnerungs- und Einfühlungsvermögen besitzt, wer die Mühen des Richtig-Schreiben-Lernens noch nicht ganz vergessen hat, wird auch für die Ressentiments und Befürchtungen, wie sie in der öffentlichen Diskussion (wenn auch nicht immer ganz offen) geäußert wurden, ein gewisses Maß an Verständnis aufbringen.

Die Verlängerung der Übergangszeit soll es ermöglichen, die Rechtschreibreform ohne besondere Kosten umzusetzen. Damit können Schulbücher im normalen Rhythmus erneuert werden. Mit Ausnahme der Sprachlehrbücher soll die neue Orthographie erst bei Neusatz Berücksichtigung finden. Auch Formulare und Drucksorten können ohne weiteres aufgebraucht werden. Vorschriftcharakter kann die Rechtschreibreform ohnedies nur für jene Bereiche haben, in denen der Staat etwas vorzuschreiben hat, also Schulen und Behörden. Der Einzelne kann amtlicherseits für seine Schreibgewohnheiten nicht belangt werden. Avantgardisten z. B., die schon seit längerem einer gemäßigten oder auch radikalen Kleinschreibung huldigen, haben auch weiterhin nichts von der Behörde zu befürchten.

Man erwartet, daß die Rechtschreibreform keine allzugroßen Veränderungen im Textbild mit sich bringen wird. Statistisch betrachtet dürften sich nicht mehr als drei Prozent aller Wörter in ihrem Erscheinungsbild verändern, wobei der überwiegende Teil (etwa ein Prozent, also ein Drittel aller Veränderungen) auf "dass"- "daß" entfallen sollen.³³

33 So H. Zimmermann in seinem Artikel, vgl. Anm. 17

Anhang :**LÖSUNGEN**

- i) Si-gle, Sig-ma, Si-gna-tur, Morgue
- ii) Fotografie : ja, Orthografie : nein, Grammofon : nein, Mikrofon : ja,
Oxid : ja, Scharm : ja
- iii) 1 = im dunkeln, 2 = im Dunkeln, 3 = mit Bezug auf, 4 = in bezug auf,
5 = Auto fahren, aber : 6 = radfahren
- iv) Schiffahrt, aber Schiff-fahrt bei Trennung, Sauerstoffflasche